SHOW-HEY シネマルーム

★★★★

オーストラリア

2008年・アメリカ映画
配給／20世紀フォックス映画・165分

2008（平成20）年12月25日鑑賞　試写会・リサイタルホール

Data

監督・脚本・原案・製作：バズ・ラーマン
出演：ニコール・キッドマン／ヒューー・ジャックマン／デヴィッド・ウェンハム／ジャック・トンプソン／ブランドン・ウォルターズ／ブライアン・ブラウン／デヴィッド・ガルピリル

みどころ

あまりにも漠然としているが、「これぞ、オーストラリア！」という意味では最高のタイトル。監督も２人の主人公もオーストラリア人としての誇りを持って、祖国の大地上で展開される一大叙事詩に全力投球！美しい大自然と１５００頭の牛の大移動の迫力を楽しみながら、ヒロインのサラがイギリスの貴婦人からたくましい牧場主に変身していくストーリーを堪能したい。なお、１９３９～４２年という時代に、オーストラリアに対して日本（軍）が果たした役割の勉強も忘れずに・・・。

■□■壮大な叙事詩でニコール・キッドマンの魅力を満喫■□■

私の大好きな美人女優ニコール・キッドマンは出演作によっていろいろな顔を見せるが、１番意外だったのが『ムーラン・ルージュ』（０１年）での底抜けに明るい演技と、『めぐりあう時間たち』（０２年）でのシリアスな演技。他方、私が最もよく似合うと思うのが『遙かなる大地へ』（９２年）、『ある貴婦人の肖像』（９６年）、『アイズ・ワイド・シャット』（９９年）、『アザーズ』（０１年）等でのレディ役。

また『ライラの冒険　黄金の羅針盤』（０７年）での彼女の役はあまり好きではない（『シネマルーム１８』１２０頁参照）が、私が感動したのは壮大な一大叙事詩である『コールド・マウンテン』（０３年）での熱演（『シネマルーム４』１３９頁参照）。彼女の故郷オーストラリアを舞台とした壮大な『オーストラリア』で、そんなニコール・キッドマンの魅力を満喫。

■□■アボリジニとは？■□■

もともと北海道にはアイヌ民族がいたし、新大陸アメリカにはインディアンがいた。吉永小百合主演の『北の零年』（０５年）は、豊川悦司扮するアイヌ族の男が大きな役割を果たしたし、テレンス・マリック監督の『ニュー・ワールド』（０５年）はアメリカ・インディアンの少女を主人公としたかなり変わった映画だった。

『オーストラリア』はそのタイトルどおり、オーストラリア人監督のバズ・ラーマンが、オーストラリア出身のニコール・キッドマンとヒュー・ジャックマンを主役に起用して描いたオーストラリアそのものがテーマの一大叙事詩。そこで大きなウエイトを持つのが、オーストラリアの先住民たるアボリジニ。私は全然知らなかったが、アボリジニとは農耕をせず、家畜を飼わず、野生のモノだけで、つまり大地から得られる糧だけで何万年もオーストラリア大陸の中で生きてきた先住民。彼らは「モノ」に固執しないため「所有する」という概念がないとのことだが、そこに白人の入植者が入ってくるとさまざまな軋轢が生まれるのは必至。

この映画に登場するアボリジニと白人の混血の少年ナラ（ブランドン・ウォルターズ）と、その祖父でありアボリジニの呪術師であるキング・ジョージ（デヴィッド・ガルピリル）の生きザマに注目！

■□■時代は？舞台は？■□■

この映画の時代は１９３９年。ナチスドイツによるポーランド侵攻が始まった１９３９年9月１日の少し前という設定。この映画のヒロインであるニコール・キッドマン扮するサラ・アシュレイは英国貴族だが、今１人でオーストラリアへの旅立ちを決断したのは夫のアシュレイを訪ねるため。彼はオーストラリアに所有している広大な“ファラウェイ・ダウンズ”と呼ばれるアシュレイ牧場を売却するために１年前からオーストラリアに入っていたが、なかなかその話が進んでいなかったわけだ。

現在のように気楽に海外旅行を楽しむ時代ではないから、イギリスからサラが未開の地オーストラリアにやって来るのは大変なこと。ところが、アシュレイは自分は忙しいからと言って迎えによこしたのは、ドローヴァー（牛追い）と呼ばれている粗野な男（ヒュー・ジャックマン）だったのはナゼ？ドローヴァーはサラをアシュレイ牧場まで無事に送り届ければ１５００頭の牛を追う仕事を約束されたため迎えに来たわけだが、２人の最初の出会いは最悪。だって、山のような荷物を抱えたプライドの高いイギリスの貴婦人と、繊細な気持など全く理解しない荒くれカウボーイの男とのウマが合うはずはないから。

サラが到着したのはオーストラリア北部の町ダーウィン。映画前半のハイライトは、このダーウィンからアシュレイ牧場までの大陸横断の旅だ。もっとも、この映画では地図が示されないので、ダーウィンからアシュレイ牧場まで何kmあるのかよくわからないのが

残念だが、そこで見る大自然の美しさと厳しさに注目！ちなみに、イメージとしてはアメリカ大陸を西海岸から東海岸まで横断するのと同じような距離感・・・？ちなみに、日本がアメリカの真珠湾を攻撃したのは１９４１年１２月８日。それに続いて日本軍はフィリピンなどそれまでアメリカが支配していた南方作戦を電撃的に展開したから、オーストラリアのダーウィンに日本軍が侵攻してきたのは１９４２年２月。この映画はそんな時代を、そんな舞台で描く壮大な叙事詩であることをまずしっかりと把握したい。

■□■混血少年ナラが見たのは？■□■

大貴族が広大な領地や広大な牧場を持つことは容易だが、難しいのはその管理。自分の目の届く範囲内であれば自分自身の力でそれなりの管理が可能だが、イギリス人貴族のアシュレイがオーストラリアに広大な牧場を所有した場合、その管理責任者はよほど信頼できる男でなければならないはず。ところが、アシュレイが任命したマネージャーのニール・フレッチャー（デヴィッド・ウェンハム）は、見込み違いの悪党だったようだ。つまり、フレッチャーはアシュレイ牧場の隣りの大牧場主キング・カーニー（ブライアン・ブラウン）と組んで、アシュレイの牧場の乗っ取りを企てていたのだった。アシュレイ牧場の会計士キプリング・フリン（ジャック・トンプソン）はそんな事情を知りながらフレッチャーに協力せざるをえなかったために酒に溺れた（？）ようで、今や酒が唯一の友となっていた。

映画の冒頭に登場するのは、アボリジニと白人の混血児少年ナラが、ある日川の中で目撃した衝撃的な事件。つまり、アシュレイ暗殺の現場だが、それを実行したのは果たして誰？ナラ少年は突然ご主人を失ってしまったアシュレイの馬に乗って現場を離れたが、その生々しいシーンが彼の記憶から消えなかったのは当然。ただ、それを誰かに説明しても、そんな混血少年の言うことを誰が信じるの？また、それ以前に白人との混血少年が発見されれば、母親のデイジーから引き離されて施設へ送られてしまうこと確実だ。

ダーウィンから長い旅を経てやっとアシュレイ牧場に到着したサラが見たのは、無惨な夫の死体。そして荒れ果てたファラウェイ・ダウンズ牧場の屋敷だった。さあ、サラはここからどんな風に態勢を立て直すのだろうか？

■□■再び１５００頭の牛と共にダーウィンへ■□■

日本人は農耕民族だから米が主食だが、白人は狩猟民族だから牛肉が主食。でもないが、白人にとって牛肉は日常欠かすことのできない食料品。したがって、日本との戦争が近い将来予想されるオーストラリア軍にとっては軍隊用に大量の牛肉つまり牛が必要。そこでサラが立てた戦略は、アシュレイ牧場の優秀な牛１５００頭を軍に売ること。それが実現できればアシュレイ牧場を立て直すことができるが、既に隣りの大牧場主キング・カーニーは陸軍大尉ダットンとの間で自分の牧場の牛の売買契約を締結しているかも？しかし、

そんなことを言っていたのでは何も始まらない。とにかく、コトをスタートさせなければ・・・。

そんな中、サラが頼りにできる男はドローヴァーしかいなかった。その結果、幸か不幸かは別として、ここに①ドローヴァーをボスとし、②カウボーイ（？）として馬に乗ったサラ、③アル中の会計士のキプリング・フリン、④混血の少年ナラ、⑤ドローヴァーにつく２人のアボリジニの牧童マガリとグーラジ、⑥アボリジニの家政婦バンディ・レッグス、⑦中国人料理人のシング・ソングという、奇妙な混成カウボーイ部隊による、１５００頭の牛を連れたダーウィンへの旅が始まることに。

■□■フレッチャーの妨害工作は？■□■

ナラの報告やキプリング会計士の報告を聞いて、フレッチャーの不正と裏切りを知ったサラが、フレッチャーにクビを宣告したのは当然。しかし、逆にフレッチャーもこれによってはっきりとキング・カーニーの腰巾着へと立場を移し、アシュレイ牧場の乗っ取り活動をやりやすくなったのも事実。しかして、それ以降アシュレイ牧場からダーウィンまでの１５００頭の牛を連れた大陸横断の旅に対するフレッチャーたちの妨害活動は次第に露骨なものに。

その第１は、突然火を放つことによる牛たちの暴走の誘発。大地を揺るがす１５００頭の牛の暴走はものすごい迫力だが、その牛たちが進む先は崖。そのまま突っ走れば全頭アウトになってしまうことは明らかだ。さあ、数人のカウボーイたちの力でその暴走を止めることができるのだろうか？既にキプリング会計士は暴走する牛たちの下敷きとなり、崖っぷちに立つのはナラ少年のみ。このまま牛が突進してくれば・・・。それを救ったのはアボリジニの呪術師キング・ジョージとナラとの不思議な通信だが、広大な大地オーストラリアならではのそんなシーンの圧倒的迫力を堪能したい。

フレッチャーの妨害の第２は、川への毒の混入。これによって、水を失った一行は砂漠を越えるしか道がなくなってしまったが、ここでも窮状を救ったのは道案内をしたキング・ジョージ。こんな困難に満ちたダーウィンへの大移動の中、副産物として生まれてきたのがサラとドローヴァーとの信頼と愛情。サラに対してドローヴァーの身の上話が語られるようになれば、２人の仲が急接近していることは明らかだ。

フレッチャーの数々の妨害工作をはねのけてダーウィンに到着したサラたちには、キング・カーニーを押しのけてのダットン大尉との売買契約の締結というさらなる関門が待っていたが、今やイギリスの貴婦人から一大起業家に成長したサラにとっては、それくらいのことをクリアするのは容易なこと。ドローヴァーの協力を得た見事な手腕にキング・カーニーは歯ぎしりするばかり・・・。

■□■サラの決断は？ドローヴァーの決断は？■□■

本来サラがイギリスからオーストラリアにやってきたのは、ロンドンの邸宅を守るためにオーストラリアのアシュレイ牧場を売却すること。したがって、アシュレイ牧場で飼う１５００頭の牛の売却に成功したうえで、隣地の牧場主キング・カーニーからアシュレイ牧場の買い取りを提案されれば、今が理想的な売り時であることは明らかだ。ところが、そこでのサラの返事は「NO」。つまりアシュレイ牧場は売らないという意思表示だが、それはナゼ？

他方、サラからアシュレイ牧場のマネージャーになって欲しいと頼まれたドローヴァーの決断は？それは乾期になれば牛追いに出かけるが、雨期の間だけならマネージャーはオーケーという中途半端なもの（？）だったが、それでも２人は公私ともに十分ハッピー・・・？

■□■ウォークアバウトとは？■□■

この映画のストーリーの一方の軸は、イギリスからやって来た優雅な貴婦人サラが荒くれ男のドローヴァーと出会い、オーストラリアの大自然に接し、アシュレイ牧場を守るため１５００頭の牛追いの旅に出発し、数々の苦難を乗り越えていく中で大きく変化し、成長していくサマ。ニコール・キッドマンはユーモラスな演技を交えながら、成長していくサラの姿を見事に演じていく。

この映画のストーリーのもう１つの軸は、アボリジニに注目したもの。したがって、奇妙な服装で奇妙な言葉をしゃべり、奇妙な行動をするキング・ジョージと、混血の少年ナラが節目節目で大きな役割を演じ、物事の進行役や転換役を果たしていく。そんなアボリジニを軸としたストーリーの中で語られるのが「ウォークアバウト」。

これはアボリジニ特有の徒歩で放浪の旅をするという成人の儀式だが、ダーウィンから再びアシュレイ牧場に戻り、サラをボスとし、ドローヴァーをマネージャーとして幸せな牧場生活を続けていた２人の価値観が衝突したのは、そんなウォークアバウトをめぐるナラの教育方針。つまり、ドローヴァーはナラがキング・ジョージと共にウォークアバウトの旅に出かけることに賛成だが、サラはナラを学校へ行かせるべきだと主張したわけだ。さらに、ドローヴァーに対していつも一緒にいてほしいと願うサラと、自由に牛追いができないのはイヤだと考えるドローヴァーとの間に、少しずつ違和感が生じてきたようだ。

そんな中、遂に「自由を犠牲にできないのなら、もう帰って来ないで！」とヒステリックに（？）言い放ったサラに対して、売り言葉に買い言葉のようにドローヴァーが返したのは、「ボスは君だ」という言葉。こりゃシンプルだが、２人の絶交宣言？さてそうなると、ウォークアバウトに出かけたナラ少年は大丈夫？

■□■風雲急を告げる中、舞台は三たびダーウィンに■□■

真珠湾攻撃に大成功した日本軍の南方作戦の展開は素早かった。それに呼応するかのようにシンガポール陥落後の１９４２年2月１５日オーストラリアは対日参戦を決定することに。さてそうなると、日本軍によるダーウィンへの空からの攻撃は時間の問題。そう考えたオーストラリア政府が、軍関係者以外はすべてダーウィンから奥地へ避難するようにとの命令を出したのは当然。そんな中、あえてサラが軍本部の電話交換手の仕事を世話してもらってまでダーウィンに残ったのは、キング・ジョージと共に旅立っていったナラが警察に捕まったと聞いたため。

今ナラは、アボリジニの少年たちと共に島にある教会に隔離され、キング・ジョージはサラの夫アシュレイ殺しの犯人に仕立てあげられて刑務所に入っていた。サラは日本軍との戦いが風雲急を告げる中、そんな２人を救出するためいろいろと手を尽くしていたが・・・。

他方、アシュレイ牧場を去り牛追いの仕事に従事していたドローヴァーも、ダーウィンが日本軍の攻撃目標とされていると聞き、サラを助け、ナラとキング・ジョージを救出すべくダーウィンに向かったが・・・。日本軍の爆撃機の攻撃をモロに受けたダーウィンの町はあちこちが燃えあがっており、サラたちが電話交換手として働いていたミッション・アイランドも重要な攻撃目標とされて既に爆破され炎上中。さて、サラの運命は？

■□■カーニーは？フレッチャーは？最後の大波乱は？■□■

映画はサラとドローヴァーの物語とは別に、フレッチャーの物語も描いていく。アシュレイ牧場のマネージャーの地位をサラによって解雇されたフレッチャーは、キング・カーニーに雇われてサラたちの妨害工作を展開したが、それがすべて失敗したためカーニーの信頼を失ったのは当然。そこでフレッチャーがとった手段は、「やられる前にやってしまえ！」という荒っぽいもの。つまり、カーニーからクビを切られること確実と読んだフレッチャーは、逆にカーニーを殺害して牧場を乗っ取ってしまったわけだ。その手練手管の詳細は描かれないが、これはある意味お見事。

しかし、最後まで軍と密接な連絡をとり合うため、ダーウィンの町に残り、妻をサラと共に電話交換手の仕事に従事させたのがどうも失敗だったようだ。つまり、日本軍の爆撃を受けたミッション・アイランドの中で死亡したのがサラではなくフレッチャーの妻だったから、フレッチャーの怒りと絶望は頂点に。しかして、ドローヴァーが離島に隔離されたアボリジニの少年や神父たちを連れてダーウィンに奇跡の生還をしてきた姿を見たフレッチャーの行動は？そんな最後の大波乱は多少詰め込みすぎの感もあるが、かなりスリリングだから十分楽しむことができるはず。そして、そんな大波乱の後、最後に訪れる大団円とは・・・？

２００９（平成２１）年1月6日記